

新刊紹介

中西嘉宏『軍政ビルマの権力構造—ネー・ウイン体制下の国家と軍隊 1962—1988』

中西嘉宏



京都大学学術出版会
2009年

デモ隊を殴りつけ、日本人ジャーナリストを射殺し、僧侶を拘束して仏像を破壊する。とにかく理不尽で暴力的な権力者とその手下たち。ミャンマー（ビルマ）の軍政に対するイメージはこういったものだろう。それも不思議なことではない。ほとんどの日本人は、反政府デモが弾圧されたという報道や、民主化運動の指導者であるアウンサンスーチーに関する報道を通してミャンマー政治を知る。一般的な報道のなかでの軍政は、市民を弾圧する悪者でしかない。

もちろん、こうしたイメージがす

べて誤りというわけではないだろう。事実の一面をとらえてはいるのは確かだ。だがその一方で、ミャンマー軍政の実態となると、実はわかっていることが少なかった。指導者はどういふ人たちなのか、彼らはどうやって政権を運営しているのか、いったいどうして民主化を拒み、時代遅れにも思える軍政を四〇年以上持続できているのか。調査の難しさもあって、こうした問いがまともに検討されたことはない。

本書は、この謎を解明しようとした作品である。ただ、真正面から現代政治を知ろうとしても、噂に近い伝聞情報や型どりの公式発表など、信憑性の薄い情報源をもとに議論せねばならず、軍政の謎はなかなか解けない。そこで本書は少しひねってあって、歴史的に軍政の内部を見ようとする。

一九六二年から八八年まで続いたネー・ウイン体制が分析の対象である。現軍政の前の軍政である。だから、本書を読んで現代ミャンマーがすぐにわかるということはない。だが、内部資料の発見や関係者へのインタビューなどに基づいた議論がなされており、かなり実証的な分析になっている。すぐには役立たないけれど、中長期のミャンマー政治をまじめに考えるには必要なことが論じられているはずだ。

肝心の内容だが、ネー・ウイン体制についておもに六つのテーマを論じている。第一に国家イデオロギー

の形成、第二に一党制の構築、第三に文民官僚機構の変容、第四に政治エリートの実態、第五に軍隊と政治の関係、第六に体制崩壊過程である。全体のストーリーを簡単にまとめる以下のようなことになる。

一九六二年三月二日にクーデタを起こしたネー・ウイン将軍は、その後から国内の社会主義化をはかった。国家機構については、革命政党组织し、文民官僚機構も人民の代表がその枢要ポストを占めるようにするなどの改革を実行した。ところが、そうした改革は既存の制度を破壊するばかりで頓挫してしまふ。しかし、ネー・ウインはその過ちを認めない。それどころか、自身の最大の権力基盤である国軍将校を続々と党や国家の枢要ポストに就かせた。その結果、将校が国家機構の役職に転出するという人事慣行が非公式に制度化され、国軍の政治的影響力が安定することになったのである。

さて、内容紹介はこれくらいにして、せっかくなので本書執筆の背景に触れておこう。どの本にもあることだと思いが、本書もいくつかの幸運に恵まれて生まれた。

第一の幸運は、ミャンマーで現地調査ができたことである。筆者の滞在は二〇〇三年から二年間だったが、二〇〇五年八月に文部大臣が交代してから、新たに研究機関に所属して長期にわたって学術的調査を行うことが難しくなった。もう一年筆者の滞在が遅れていれば、本書の内容は

異なるものになっていただろう。

第二の幸運は、国軍の文書館が利用できたことである。外国人の利用に否定的だった館長が、筆者が訪れる前年に国軍を退役していた。新しい館長が来るまでC少佐が館長代理を務めていた。C少佐はもう一〇年以上文書館で勤めているベテランである。筆者が文書館を訪れた時は、退屈な日常に日本人が転がりこんできたことを楽しんでる様子で、驚くほどあっさり筆者の史料閲覧は許可された。

それから半年程たったころ、新館長W中佐が就任した。W中佐の方針は外国人の利用を原則認めないというものだった。幸い、筆者の利用は既成事実化していたので、調査が途中で止められることはなかった。本書の実証部分はこの文書館での調査に支えられている。

最後に蛇足だが、装丁に軍人の集合写真を使った。その理由は二つある。ひとつに、少しでも軍政の実態に近づこうとするなら、軍人が日常的にどのような仕事をしているのかを知らなければならぬ。この写真はその象徴的な一場面に思えたからだ。もうひとつの理由は、この写真に現在の最高権力者であるタン・シュエ将軍（当時二七歳）が写っているからだ。関心のある方は、是非本書を手にとりて将来の独裁者を探してもらいたい。

（なかにし よしひろ／アジア
経済研究所地域研究センター）